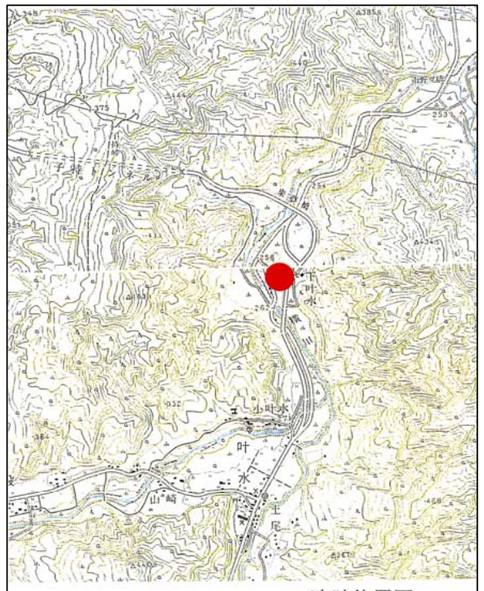
下叶水遺跡発掘調査説明会資料

2006年10月29日（日）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

調査要項

遺 跡 名	下叶水（しもかのみず）遺跡
所 在 地	山形県西置賜郡小国町大字叶水小字下叶水
遺跡番号	昭和 53 年度登録
現地調査	平成18年5月8日～11月17日
調査面積	5,900 平方 m
調査委託者	国土交通省北陸地方整備局横川ダム工事事務所
調査原因	横川ダム建設事業
調査種別	河川跡・集落跡
時　　代	縄文時代
遺　　構	河川跡・土坑・ピット
遺　　物	縄文土器・土偶・石器・石製品
調査担当	調査研究部長　尾形輿典
	専門調査研究員　伊藤邦弘
	主任調査研究員　植松暁彦(調査主任)
	調査員　山木　巧
	調査員　渡辺淑恵
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力	山形県教育庁置賜教育事務所
	小国町教育委員会



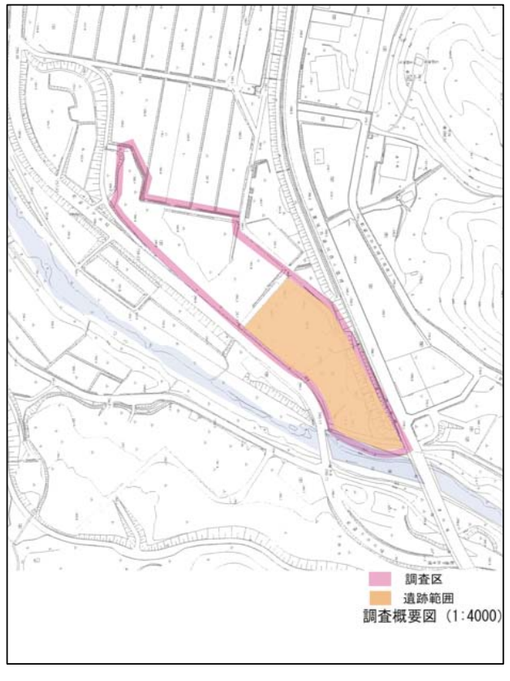
遺跡位置図

1　調査の概要

下叶水遺跡は、昭和53年度に県教育委員会により確認され登録されました。横川ダム工事事業の予定地にかかることから、平成17年度に県教育委員会が試掘調査を実施しました。その結果、縄文時代の土器や石器などの遺物が検出されました。これにより、県教育委員会と横川ダム工事事務所との協議が行われ、事業予定地にかかる部分の発掘調査について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが委託を受け、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は5月8日から実施し、表土を重機で除去した後、手掘りで掘り進めました。調査区中央部に河川跡が見つかり、縄文土器や石器、土偶など多くの遺物が出土しました。また、河川跡の周囲には墓や建物跡なども見つかりました。

調査成果は、記録や遺物の整理作業を行い、発掘調査報告書として刊行されます。



調査概要図（1:4000）

調査区　遺構検出状況

2　立地と環境

下叶水遺跡は、小国町東部の叶水地区に所在します。遺跡は、飯豊山系に属する地蔵岳を水源とする横川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は263mを測ります。

小国町には旧石器時代から縄文時代にかけて多くの遺跡が存在することが知られています。

旧石器時代の遺跡では、東山型ナイフ形石器の標識遺跡である東山遺跡、岩井沢遺跡、畦坪（横道）遺跡があげられます。

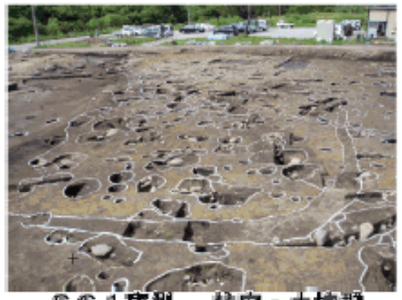
縄文時代の遺跡としては、蟹沢遺跡、朝篠遺跡、下野遺跡、古屋敷遺跡、墓窪遺跡、谷地遺跡などがあります。これらの遺跡はいずれも発掘調査が行われ、蟹沢遺跡と下野遺跡では、北陸系の土器が出土しており、北陸地方との交流があったことが窺えます。

遺跡の周辺にも、野向遺跡、市野々向原遺跡、千野遺跡など、縄文時代早期から晩期に至る遺跡が、横川とその支流の明沢川との合流地点までの河岸段丘に分布しており、川や山野の自然の恵みを得られる快適な環境の中にあったものと考えられます。

遺跡の川下には、楠木正成の四男、傑堂能勝の創建と伝えられる曹洞宗飛泉寺跡と、樹齢200年を超えるといわれる、町のシンボルの大銀杏がそびえています。

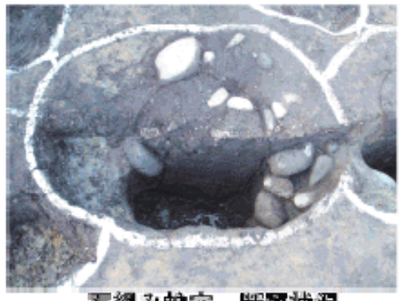
面整理作業状況

遺構精査状況

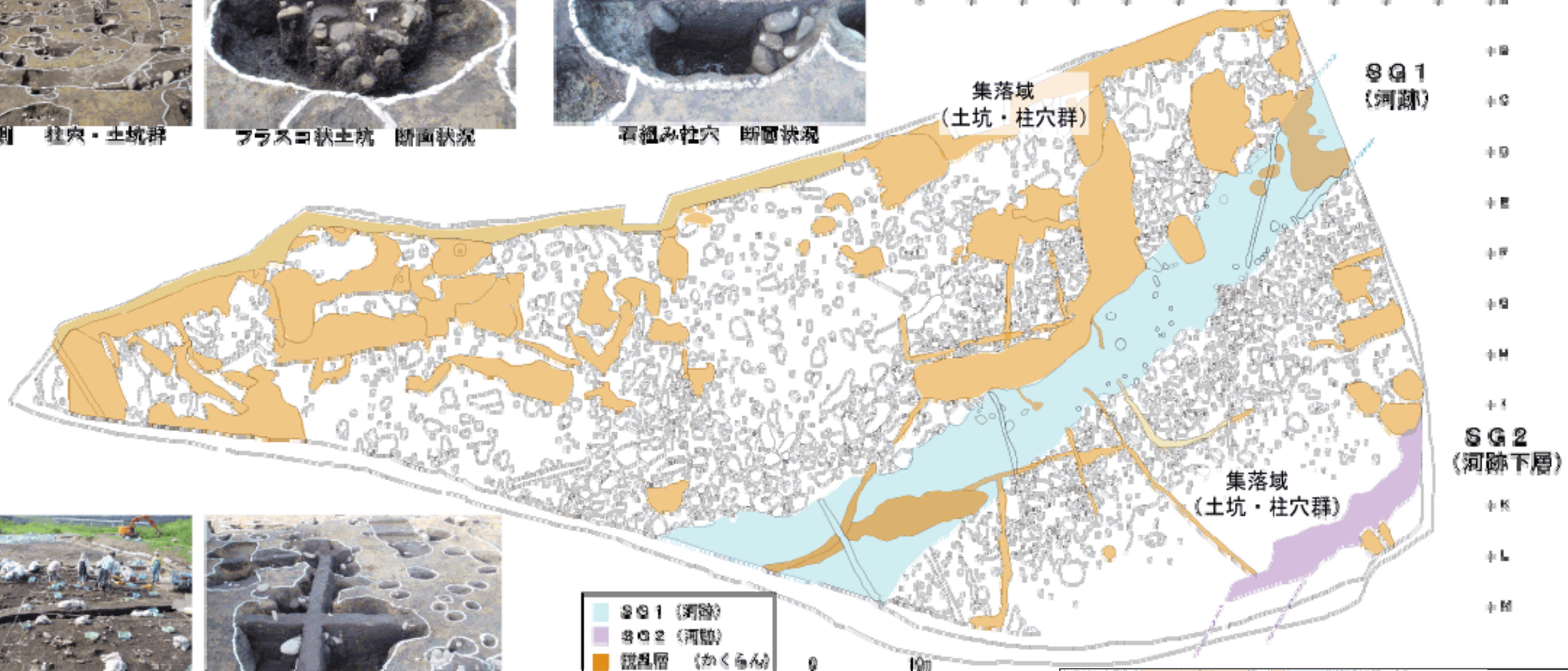


ＳＧ１東側　柱穴・土坑群
（河跡）

フラスコ状土坑　断面状況

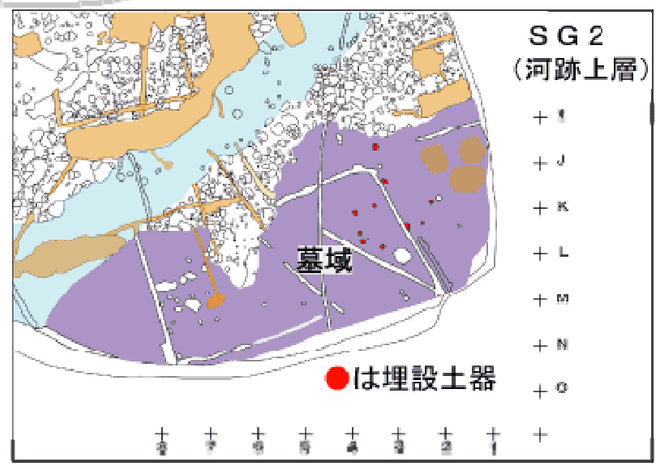


石組み柱穴　断面状況



ＳＧ１遺物包含層　掘り下げ作業
（河跡）

ＳＫ569　精査状況



ＳＧ１遺物包含層　遺物出土状況
（河跡）

埋設土器群　精査状況

埋設土器　断面状況
（埋甕）

３　検出遺構

遺跡では、縄文時代の終末期の集落跡や埋設土器群(墓域)、河川跡などが発見されました。

集落跡は、河川跡の両岸に沿って、住居の柱穴跡や貯蔵穴などが主に検出されました。

住居の柱穴は、大型で長さ約１ｍ前後を測り、平面形が円形や小判形を呈します。また、柱を固定するための根固め石を詰め込んだものが多いのも特徴です。

貯蔵穴は直径約１～２ｍの円形で、断面形がフラスコ状を呈する形態です。
集落外縁部には、深鉢を縦に埋めた埋設土器(まいせつどき)が集中して10基ほど確認されました。子供のお墓とされ墓域と考えられます。

河川跡(ＳＧ１)は、幅約８ｍで最も深い所で約1.2m以上あります。上層では土器や石器を中心に多量の遺物が廃棄され、土偶や石棒、石刀などの祭祀品も出土しました。

ＳＫ708（柱穴）遺物出土状況

ＳＫ631（フラスコ状土坑）遺物出土状況

ＳＧ1(河跡)遺物出土状況

４　出土遺物

遺物は、河川跡を主体として、縄文土器や石器を中心に油脂箱で約600箱以上が出土しています。

縄文土器は、薄手で精巧な文様があるものが多く出土しています。寸胴形の深鉢や鉢類、壺や皿状の浅鉢、急須状の注口(ちゅうこう)土器など多様性があります。また、一部の土器には、赤彩(せきさい)や、補修孔もあります。

石器では、動物を狩るための矢じりや、加工するための石錐(いしきり)、ヘラ状の石ベラ、携帯用の石匙(いしさじ)などがあります。他に磨製の石斧なども出土しています。当時の主食であった堅果類を磨り潰す道具の磨石(すりいし)や凹石(くぼみいし)も多く出土しています。
また、漁に使った土錘(どすい：土製のおもり)もあり、当時の多様な食料事情がうかがえます。

他にお祭りの道具である土偶(どぐう)や、石刀、石剣、石棒など出土します。他にアクセサリーの勾玉や細密な線刻のある石製品があります。

RP558 出土状況

注口土器（ちゅうこうどき）

石鏃(せきぞく)

石錐(いしきり)

石箆(いしべら)

石匙(いしさじ)

磨製石斧（ませいせきふ）

凹石（くぼみいし）

磨石・石皿（すりいし・いしざら）

土錘・石錘（どすい・せきすい）

土偶（どぐう）

石棒（せきぼう）

石刀（せきとう）

装飾品（そうしょくひん）

調査区内　作業風景

5　まとめ

下叶水遺跡では、縄文時代後～晩期（約3,000年前）の集落跡や埋設土器群、河川跡２条が確認されました。

当初、この地区には幅約８ｍの河川（ＳＧ１）が横川に注いでいました。そして、河川がほぼ埋没（下層）し、沢状の浅い流れ（上層）になった頃に集落跡が営まれ始めました。集落跡は、この沢状の河川跡（ＳＧ１）の両岸に沿って住居跡や貯蔵穴などが確認されました。これらの分布は、河川の両岸辺から約15ｍ幅の範囲に集中し、集落が河川に沿って帯状に広がっていた事が分かります。また、遺構の重複から４時期以上の時期差があり、住居などが建て替えられながら長期間（約500年間）に渡り集落が営まれた様です。

住居跡は、10数棟確認され、１棟の住居は４～６基の大型の柱穴で構成されます。住居は柱穴が直径約４ｍ前後の平面形が円形や亀甲形に並びます。周辺には、大小のフラスコ状の貯蔵穴が住居を巡るように分布し、これらがセットとなり数棟単位で集落を構成していたようです。そして、集落の間を流れる沢状の河川（ＳＧ１上層）からは、当時集落で使われていた縄文土器や石器が多量に出土し、土偶や石棒などの祭祀品も出土しました。土錘なども出土し、横川を利用した漁労の存在も明らかになりました。

埋設土器を主とした墓域は、調査区の北東部に集中します。また、埋設土器は、河川（ＳＧ２）の洪水などによる堆積土が集落や沢状の河川（ＳＧ１）を一時埋めた上に構築されます。これらから埋設土器群は、今調査で最も新しい段階の遺構群の一つと考えられます。

これらから集落は、小河川の洪水などを期に集落の構成が変化し、集落が縮小したり、廃棄や移転した可能性が推測されます。